

観光まちづくりリズム

東大都市デザイン研プロジェクトへの期待

酒井 憲一

東京大学都市デザイン研究室 OB

目次

はじめに

第1章 都市デザイン研とOB ツアコン

地元の誠意と観光産業側の距離・
NPO 作成観光地図の魅力
資格取得へ乗務研修の実際
ツアコン学科研修

第2章 観光の原点と復権の拡大

国の光・地域の光から
ツーリズムは巡り・循環・交流
相対価値追求のアムステルダム宣言
ニューツーリズム

第3章 観光産業と行政の観光まちづくり

旅行業法と第三種旅行業者
観光まちづくりの潮流

第4章 西村理論のパーステクティヴ

イノベーションの波頭
観光まちづくりとは何か
観光からまちづくりへの接近
まちづくりから観光への接近

第5章 『観光まちづくり』に読み取る東大プロジェクト

研究室ホームページ「プロジェクト」は配電盤
東大プロジェクト各論
大野村 逆転の発想
『都市デザインマガジン』大野村
八尾 駅から旧町まで回遊提案
『都市デザインマガジン』八尾
総合魅力をつくり出す喜多方・くらはく
『都市デザインマガジン』喜多方
鞆の浦 まち博・ヨルトモ・鞆雑誌
『都市デザインマガジン』鞆の浦
佐原 合言葉「ぐるぎ+」の魅力・回遊性
『都市デザインマガジン』佐原
浅草 「観音うら」イメージアップ作戦
『都市デザインマガジン』浅草
高山 越中街道調査・半間ルール実験
古川プロジェクト(2001年度のみ)
『都市デザインマガジン』高山
足助 まちづくり報告展とサイン計画
『都市デザインマガジン』足助
新宿 景観計画改定へ6地点調査
『都市デザインマガジン』新宿
神楽坂 早大法科大学院と共同研究
『都市デザインマガジン』神楽坂
京浜臨海 再生提案から大シンポジウムまで
『都市デザインマガジン』京浜臨海
都市空間の構想力 全国駆け巡り調査
『都市デザインマガジン』都市空間の構想力
大田 モノづくりのまちづくり
田村地域アーバンデザインセンター(UDCT)

第6章 都市デザイン研究室の特色

第7章 観光まちづくり東大方式の追求

あとがきにかえて 東大方式と観光まちづくりツアー

はしがき

東大都市デザイン研究室のまちづくりプロジェクトは、どこか現代のグランドツアー（Grand Tour）といえそうなフィーリングが感じられる。グランドツアーは、17世紀からイギリスの上層の子弟が、その学業の終了時に行った大規模な国外旅行である。知的ハイソサエティの東大院生らが、グランドツアーの主な目的地であったフランスとイタリアにかえて、日本各地に逗留してまちづくりを実践研究しているのは、グランドツアーの一端を思わせる実験旅行の観がある。

そのまちづくりプロジェクトは、2000年度に大野村（岩手県） 鞆の浦（広島県） 神楽坂（新宿区）プロジェクトが発足した。いわばその年が「東大まちづくりプロジェクト元年」であり、2010年は10周年に当たる。1997～1999年度間に、行政から都市デザイン研究室へあった委託調査作業がプロジェクトの胎動で、そのころをまちづくりプロジェクトのプレ段階といえよう。タイムリーな10周年を迎えて、「観光まちづくりツーリズム 東大都市デザイン研プロジェクトへの期待」と題する論考をまとめた。本稿は『都市デザイン研マガジン』114号（2010.1.10）に寄稿した「アメニティツーリズム試論 序」を改題して、本論をつけたものである。



お台場シンポジウムの西村教授（2004.4.14）



大井川鉄道SLと筆者（家山駅2010.1.1）

「ほら、西村先生でしょ。岡村、野原、中島、ほら窪田先生でしょ。みな研究室のメンバーです。私のいた研究室です」

2010年元旦、大井川鉄道SLツアーに参加し、家山駅に入線したSLが停車するのを待って、ホームで同行の友人に西村幸夫編著『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』（学芸出版社、2009年2月）を見せ、末尾の「執筆担当および執筆者略歴」ページの人名を指差した。歳末に東大生協書店で見つけた本だった。

すぐにも読みたい気持ちを抑え、旅先の蒸気機関車の前で開こうと携えてきたのだった。SLが粉雪舞う空へ蒸気を噴き上げている。その白い蒸気をスクリーンにして、走馬灯のように指導教官だった教授西村の観光についてのエピソードがよみがえった。行き着いた先に、2004年4月14日お台場で開かれた「臨海副都心(Tokyo Water Front City)の可能性を探る『お台場がいま、変わる！』シンポジウムがあり、観光まちづくりを語る西村パネリストの姿があった。

西村は、「臨海地区観光まちづくり基本構想」を策定した臨海地区観光まちづくり検討会の座長で、「職住学遊」を唱え、観光とまちづくりの交点から、トータルにまちづくりを捉える知的循環システムを推進する先駆者だった。

この日は、2004年度大学院の西村講義「都市設計特論第1」の初日で休講と掲示されていたが、このシンポジウムを自分勝手に課外授業とみなして駆けつけて聴講した。そして、初めてわが指導教官と観光との結節点を知った。

学部講義「都市保全計画」の期間中に、1000ページを超す西村の名著『都市保全計画 歴史・文化・自然を活かした街づくり』（東大出版会、2004年9月）が上梓され、3ヵ月後にスピード刊行した拙著『教え子のノートが記した歴史的講義 西村幸夫「都市保全計画」&東大研究室ホームページ熟年聴講生日誌』（アメニティライフ、2004年12月、以下『西村幸夫「都市保全計画』』と表記）の冒頭を「課外・臨海副都心こそ森」（p58）としたのは、その感動を記録したためである。「観光まちづくり」の用語は、10年ほど前に運輸省観光部のメンバーと西村が行っていた研究会で生まれた。そのため、いささか官製イメージをとめないがちなのを、西村の理論武装で公正な影響を与えているのは、全国の大学でも評価の高い都市デザイン研究室の「まちづくりプロジェクト」の実績が知られていたからでもあろう。

こうしたことに知的触発を受けた私は、ライフワークにしているアメニティの大きな体験の場が旅であるという認識にコンセプトを与えられ、その基本認識に立って「観光まちづくりツーリズム」立論のためには、観光産業という虎穴に入って問題提起することが必要と考えた。その結果、2009年11月に旅行業に定める旅程管理主任者の資格をとった。いわゆるツアーコンダクターである。

考えてみれば、「観光まちづくり」という用語は、「まちづくり観光まちづくり」の循環概念の略ではなかろうか。「観光まちづくり」は「まちづくり観光」へ、「まちづくり観光」は「観光まちづくり」へと循環する現象を「観光まちづくり」という語に託したのであり、「観光まちづくり」は「まちづくり観光」を内包した用語といえよう。

観光まちづくりについては、西村が長年経験してきたボランティアまちづくりと、ビジネスである観光産業との矛盾解消に時間がかかるが、『観光まちづくり』の刊行が好機となり、その機運が高まった。同書において、都市デザイン研究室の准教授・助教が西村につづいて、立論を競い始めたことなどは、観光まちづくり理論充実への大きなステップである。

政府の観光立国政策もあり、書店でも観光関係の書籍コーナーが軒並み拡充されている。しかし、本格的な観光まちづくりテキストは、『観光まちづくり』のみである。したがって、右顧左眄することなく、それ一冊を中心に学んだ結果、東大プロジェクトにおける「観光まちづくり」の強化と、観光産業側のツアーコンなど第一線の研修・実務への「観光まちづくり」導入の必要性を痛感した。

そうしたインパクトのある『観光まちづくり』に接して、執筆を思い立ったのが、この「観光まちづくりツーリズム 東大都市デザイン研プロジェクトへの期待」である。第1章は、私自身がツアーコンの資格を得ることによる観光産業にかかわる考察、第2章は西村を主とした都市デザイン研究室陣の観光まちづくり概念、第3章は、同研究室まちづくりプロジェクト活動の『都市デザイン研マガジン』における全記録で、結びに、東大観光まちづくりプロジェクト方式の提案を付した。

全編中、関係各地のイメージを喚起する例として、愛好する「旅情ミステリー」の一節を配し、一種の舞台まわし役を兼ね、観光まちづくりにおける多様なノウハウの活用を示唆した。本書は収集していた旅情ミステリーをおいたが、より適したジャンルは多く、今後それらを含む各メディアに東大まちづくりプロジェクトの活動が取り上げられるとともに、先駆的な観光まちづくり東大プロジェクト方式が生み出されることを念願したい。（文中敬称略）

2010.7.5